

統一地方選挙

特集2

Special Feature 2

激突する中央政党と地域政党

統一地方選挙が目前に迫り、住民の関心がこれまでになく高まっている。議会への不信と既成政党への不満、そして政治全体への失望がその要因だ。こうしたなか、既成政党と一線を画し、地域の自立を訴える地域政党が台風の目に。統一地方選挙の最大の争点は、機能不全の議会と形骸化した二元代表制の再生である。
本誌委嘱記者・相川俊英

決戦前夜



い関係にある。清水代表は「イエスマンの議員をつくる気はありません。とにかく議員に共通の危機感を持っていただきたい。そうでないと実のある議論となりにくいのです」と語る。

議員の役割は地域の要望を行政に伝え、実現させることとされてきた。だが、それは「あれもこれもできた」時代のこと。今は「あれかこれかを選択する」時代に。清水代表は「これからは政党間の対立よりも国と地方の対立が激しくなるのでは」と、分析する。

吹田

龍馬プロジェクトから地域政党の結成へ

「地方議員の手で日本を変える」。こんな思いで結集した超党派の若手議員グループが、昨年1月から同志を求めて全国キャラバンを重ねていた。一連の活動は「龍馬プロジェクト」と呼ばれ、既成政党を超えて200人以上の若手議員が参集した。この「龍馬プロジェクト」が地域政党の立ち上げに結び付いた事例がある。

大阪府吹田市で昨年11月、若手市議2人が地域政党「吹田新選会」を設立した。代表は石川勝市

議(42歳)で、神谷宗幣市議(33歳)が幹事長に就任した。じつは「龍馬プロジェクト」を提唱し、推進したのが神谷市議だった。

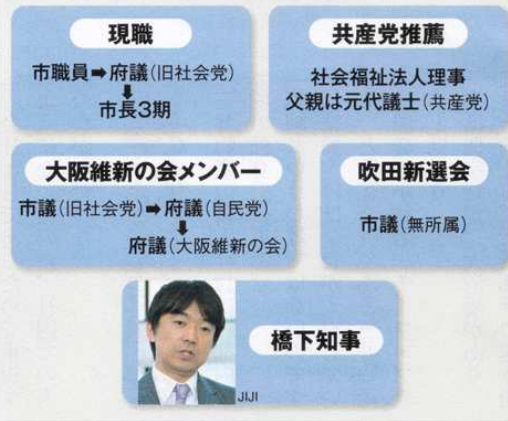
大学在学中に1年間海外を回った神谷氏は、日本の同世代や社会に強い危機感を抱くようになった。地域や国の発展に寄与

したいと政治の道志し、29歳のときに無所属で吹田市議選に挑み、当選。一人会派で議員活動を始めた。

しかし、議会のなかはまるで異次元だった。共通言語が見つからず、職員にも相手にされなかった。途方に暮れたとき、ある勉強会に誘われた。そこで努力する議員らの姿に接し、開眼。仲間をつくる重要性に気づいた。同じ頃、自民党会派にいた新人の石川市議も現実には落胆していた。議会は議員間討議もなく、市長提案を流し作業のように可決するだけ。「議会を変えなければいけない」と焦燥感を感じてきた。神谷市議の誘いを受けて勉強会に通うようにな

橋下知事をめぐって混戦

吹田市長選の争い模様



街頭活動中の「吹田新選会」。若い世代にツケを回してきた旧態依然たる政治の一新を目指す若者らがマイクを握る

り、2人は盟友に。「龍馬プロジェクト」や地域政党「吹田新選会」の設立へと動いた。

地域政党「吹田新選会」は市長選と市議選に候補を擁立する。最も力を入れる政策は、教育と子育て、それに行財政改革だ。市長選

には「大阪維新の会」の幹部も出馬を表明し、混沌としている。

ブームへの便乗組 中央政党への変貌

既成政党への不信が高まるなかで、まるでブームに便乗するかのようになされた地域政党も少なくない。統一地方選前の「駆け込み地域政党」である。これらは有権者から冷たい視線を注がれている既成政党の議員らが、選挙対策的に立ち上げた感がある。「東京維新の会」や「佐賀維新の会」などは、国会議員が音頭を取って誕生したケースであり、混迷する政局の新たな展開を睨んだ政治的な動きと見える。

また、中央政党に変貌しつつある地域政党も現れた。地域政党ブームを巻き起こした名古屋の「減税日本」だ。河村たかし代表(名古屋市長)は各地を回り、公認候補擁立に積極的だ。地域政党といえながらも「減税ナゴヤ」ではなく、「減税日本」と命名した河村代表である。国政が混迷を深める状況下で、政治家としての野心を抑え切れないのかもしれない。

雨後のタケノコのように誕生する地域政党だが、看板ではなくその中身をしっかりと見つけることが、不可欠だ。